

子ども主体の伝統 息づく「まつり」

始まる前の準備。跳び箱やマットを手分けして園庭に運び出す



子どもたちが考えた「つなとりげーむ」。仲間を助けに走り回る
＝いずれも神戸市東灘区御影山手1、頌栄幼稚園

27年春休園の神戸・頌栄幼稚園

遊びから生み出す競技、準備や判定も

園児数の減少などにより2027年3月で休園する頌栄幼稚園（神戸市東灘区御影山手1）。今年で創立136年と神戸で最も長い歴史を誇り、徹底した「子ども主体」の教育を惜しむ声上がる。その特色を垣間見られるのが、同園の「あそびまつり」。このほど開かれた伝統の行事取材した。
（鈴木久仁子）

10月18日朝。小雨がちらつく六甲山を背に子どもたちが登園してきた。現在、3〜5歳の44人が通う。

園庭は一面芝生。ほとんどの子どもが裸足だ。プログラムに沿って体を動かす秋の行事と言え一般的なのは「運動会」でも、想像とはまるで違った。まず行事の準備をするのは子どもたち。園舎からてんでに出てくると、跳び箱やマットを並べに行く。

跳び箱を重ねるのは難しい。うまくはまるように、声をかけ合い何度もやり直す。マットを均等に並べるのも工夫がいる。場所を定める子の意見をほかの子が聞き、協力して移動する。先生たちは一切手を出さず、見守っている。集まった保護者

も遠巻きにのんびりと待っていた。

まさに、この幼稚園ならではの光景。いつ行事が始まるかは子ども次第なのだ。

厨子直子園長が言った。「いわば子どもたちの遊びの世界を大人が見に行く。それがこの行事」。なるほど。重要なのは「跳び箱を何段跳べたか」ではなく、それぞれのチャレンジを見逃さないこと。そして、子どもが待っている間に友だちとどう過ごしているか。

これから何が始まるのだろうか？ 例えば「ダンス」や「組み体操」など先生の指導で完成を目指すし、本番で拍手をもらうような場はない。種目は子どもたちの遊びから生み出される。自

「回り道いっぱい」の学び、存続願う声

らルールを考え、判定のために台に上がってマイクを握るのは子どもたちだ。

トラブル発生！ それは「かみなりかけっこ」の最中だった。1人の子がコースを間違えた。別の子が順位の判定に不満を訴えた。「僕の方が速かったぞ！」と判定役の子に詰め寄る。ほかの子も加勢し、押し問答になった。

ここでも、大人は静かに成り行きを見守る。「けんかやめ事は大きな学び」と厨子園長。事前に決めたルールは「審判に従う」。子どもたちはルールを思い出し、自力で決着にたどりついた。進行は10分以上中断したが、会場は終始、和やかな空気に包まれた。

年長児の「つなとりげーむ」が始まった。芝生の真ん中に置いた大小さまざまな綱を取り合う。周囲を見渡し、声を出し合って味方の綱を見つけ、取りに走り回る。綱の長さか本数か、何を競うのかはその場で決まる。会場からは大きな拍手。この日を機に遊びは形を変え、飽きるまで続く。

明治期の1889年、米国人宣教師のアー・L・ハウさんが、神戸市中央区で始めた幼稚園教育。「目に見えないものこそ大切」と自然豊かな環境の中、子どもが自分たちで考え、協力し「回り道いっぱい」で成長していく学びを長年、大切に実践してきた。

休園決定を受け、保護者からは「心が育つ幼稚園」「『皆と同じ』を強制しない」と思いが寄せられ、有志で「頌栄幼稚園の存続を願う会」が発足。広く支援を呼びかける。問い合わせはメール（shoei.sonzoku2025@gmail.com）へ。